

コリント

第一

10

「成長する  
クリスチャンとして  
歩むために」

コリント人への手紙 I 10章 偶像礼拝の誘惑と訓戒

# アウトライン

## 0. イントロダクション

I. 神の民の戒めと教訓 10章1～13節

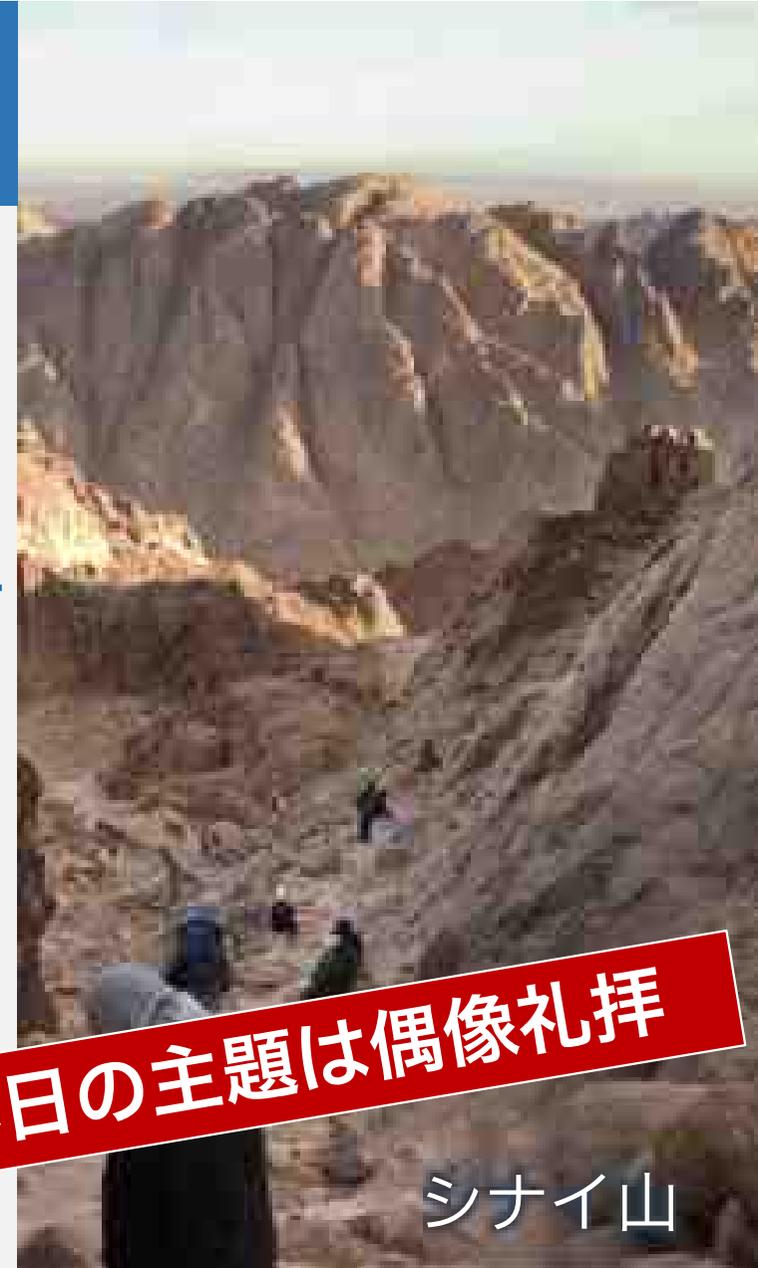
II. 誘惑と信仰者の使命 10章14～33節

## III. まとめと適用

成長するクリスチャンとして  
歩むために

本日の主題は偶像礼拝

シナイ山



## コリントの手紙とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …55年頃。 **第3回伝道旅行**の途中。
- **執筆場所** …長期滞在中のエペソ。  
この後、コリントを再訪。
- **対象** …コリントのキリスト者たち。  
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **執筆目的** …過ちを正し信仰の成長を促す。



海を挟んで約250km  
陸路を廻れば約1,000km

序文		1:1～9
罪の叱責	①教会内の分裂	1:10～4:21
	②罪に対する懲戒	5:1～13
	③裁判の問題	6:1～8
	④性的放縦の問題	6:9～20
質疑応答	①結婚	7:1～40
	②偶像に捧げた肉	8:1～,10:1～
	③使徒の権利	9:1～27
	④礼拝における秩序	11:2～34
	⑤聖霊の賜物	12:1～14:40
	⑥復活	15:1～58
	⑦献金	16:1～12
あいさつ		16:13～24



## 【当時のコリント】

- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都  
自由民20万人 + 奴隷50万人 = 計70万人
- 国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。  
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の代名詞。「コリント人のように」  
少年への性愛や複数の愛人も当然。
- 神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。

手紙の背景に、コリントの現状があった



コリントの遺跡  
アクロポリスの丘



# I. 神の民の戒めと訓戒

I コリント10章1～13節

## 【イスラエルの出エジプト】 | コリント10:1

兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下\*にいて、みな海\*を通過して行きました。

\*雲の柱、火の柱に導かれたイスラエル。

神の栄光(シャカイナグローリー)が導いた

\*分けられた葦の海の底を渡った。



## 【メシアが導いた民】 | コリント10:2~4

そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマ\*を受け、みな、同じ霊的な食べ物(天のパン・マナ)を食べ、みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。

\*海の中を通り、栄光の雲が宿り、神の民に。

- イスラエルを導いた「主の御使い」は、受肉前のキリストご自身だった。
- クリスチャンが福音を信じ、聖霊が内住し、キリストの命に満たされたのと同様に。



イスラエルも  
メシアと「一体化」した  
(バプテスマ)

## 【荒野で死んだ民】 | コリント10:5~6

しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。

これらのことは、私たちが戒める**実例\***として起こったのです。彼らが貪ったように、私たちが悪を貪ることのないようにするためです。

\*テュポス = 模範、型

■ 荒野の40年で皆死んだ。この世代で約束の地に入ったのはヨシュアとカレブの二人だけ。



コラの死 ドレ画

イスラエルを反面教師に学ぶべきということ

## 【荒野での神の民の罪】 1コリント10:7~8

あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように、偶像礼拝者になってはいけません。聖書には「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた\*」と書いてあります。

また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、淫らなことを行うことのないようにしましょう。彼らはそれをして一日に二万三千人が倒れて死にました\*。

\*金の子牛を鑄造して拝んだ。出32章

\*モアブ人の女との姦淫の結果。民25章



## 【キリストを試みる罪】 Ⅰコリント10:9~10

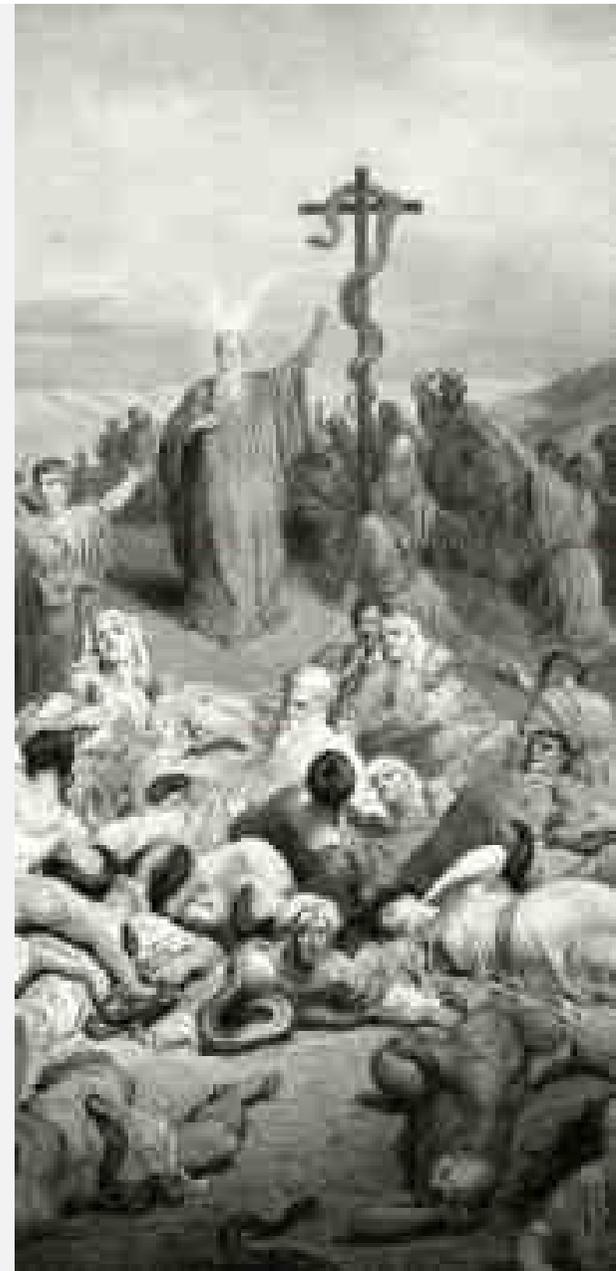
また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、キリストを試みることのないようにしましょう。彼らは蛇によって滅んでいきました\*。

また、彼らのうちのある人たちがしたように、不平を言ってはいけません。彼らは滅ぼす者によって滅ぼされました\*。

\*青銅の蛇を仰ぎ見て救われた。民21:9

➡青銅の蛇はキリストの十字架の影(ヨハ3:14)

\*最悪が、生きたまま陰府に落とされたコラ事件。



## 【戒めと教訓】 1コリント10:11~12

これらのことが彼らに起こったのは、**戒め**のためであり、それが書かれたのは、**世の終わりに**臨んでいる**私たちへの教訓**とするためです。

ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

- イスラエルへの荒野の試練と戒めは、私たち教会時代の信者の教訓に与えられた。
- 旧約聖書の人々の罪と過ちを自分自身のものとして受け取っているか？



## 【試練・誘惑】 1コリント10:13

あなたがたが経験した**試練\***(**誘惑**)はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない**試練**(**誘惑**)にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、**試練**(**誘惑**)とともに脱出の道も備えていてくださいます。

\*ペイラスモス = 試練、誘惑

➡神の与える**試練**は常に**誘惑**を伴うもの。

■今の試練は、イスラエルとは比較にならないが、彼らのように脱出の道も与えられている。

偶像礼拝の警告へ





**Ⅱ. 誘惑と信仰者の使命**      **I コリント10章14～32節**

## 【問われる受け手】 | コリント10:14~15

ですから、私の愛する者たちよ、**偶像礼拝を避けなさい\***。私は賢い人たち\*に話すように話します。私の言うことを判断してください。

\*律法の重大な命令。イスラエルの最大の課題。

\*初歩の教え・御言葉の乳を十分に吸収し、  
固い食物を食べられる確かな適用力のある人。

■ 基本的な知識を大前提に話すパウロ。

求められるのは、その上での理解力、適用力。

**基本の教えが現実に適切に反映されているか**



## 【聖餐の本質】 1 コリント10:16~17

私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つ\*ですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。

\*キリストの体は一つ。聖餐で確認されるのは普遍的教会の一部であること。

- 律法の和解のささげものは、神との交わり。
- キリスト者の聖餐、愛餐はイエスとの交わり。



聖餐は  
キリストとの  
一体化

## 【ささげ物の本質】 | コリント10:18~19

肉によるイスラエル\*のことを考えてみなさい。  
ささげ物を食する者は、祭壇の交わりにあずかる  
ことになるのではありませんか。

私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像  
に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意  
味があるとか、言おうとしているのでしょうか。

\*イエスを信じていない肉的なイスラエル。

➡ 霊的イスラエルは、メシアニックジュー

■ ユダヤ人の宗教儀式からの適用としての指摘

➡ 偶像礼拝の儀式的食事は何との交わりか？



## 【偶像の食卓】 | コリント10:20~21

むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて**悪霊**に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに**悪霊**と交わる者になってもらいたくありません。

あなたがたは、主の杯を飲みながら、**悪霊**の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、**悪霊**の食卓にあずかることはできません。

■ 偶像礼拝の本質は、**悪霊との交わり**。

→ **悪霊と交わる者は、神とは交わり得ない。**



## 【キリスト者の自由】 1コリント10:22~23

それとも、私たちは**主のねたみ\***を引き起こすつもりなのですか。私たちは主よりも強い者なのですか。

「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。

「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。

\*愛の神は嫉む神。罪を懲らしめる義なる方。

■ 神の無償の愛をないがしろにして、キリスト者の自由を誤用してはならない。



罪ゆるされたから  
何をしてもいいと  
は決してならない

獄で主を讃えるパウロ

## 【信仰の益を求めよ】 | コリント10:24~26

だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益\*を求めなさい。

市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。地とそこに満ちているものは、主のものだからです。

\*他者の信仰の成長・聖化に益となること。

■異邦人社会では、偶像にささげた肉が市場に出回ることもあるが、それは問題ない。

➔偶像礼拝の儀式的食事は避けるべき!!



## 【異教徒の食卓で】 | コリント10:27~28

あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。

- 出されたものは詮索せず感謝して食せばいい。
- 同席している信仰の兄弟姉妹が、偶像に献げた肉と知って躊躇しているなら、話は別。



同胞のユダヤ人  
信者への配慮は、  
エルサレム会議  
の確認事項

## 【配慮と原則】 1コリント10:29～30

良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、**知らせてくれた人\***の良心です。私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるのでしょうか。

もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。

- パウロがここで訴えているのは、偶像に献げた肉を口にできない**ユダヤ人信者\***への配慮。  
→教会時代、主が与えた食物に制限はない。



律法の内容は無効  
(使徒15章)

## 【神の栄光を現しているか】 | コリント10:31

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて**神の栄光**を現すためにしなさい。

- 聖書の最大のテーマは、**神の栄光**の回復。
- 栄光の主イエスにより贖いは成し遂げられた。  
すべての信仰者が、聖霊の住まわれる神の宮。  
→ **神の栄光**を証しすることが信者の責務。
- 一人の魂が救われ、聖化されていく、  
その過程そのものに**神の栄光**は現れる。



栄光の主の昇天

## 【パウロの願い】 | コリント10:32~33

ユダヤ人にも、ギリシア人にも、**神の教会\***にも、つまずきを与えない者になりなさい。

私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。

■パウロの求める配慮は、

★ユダヤ人と異邦人を救いに導くため。

★**教会\***(双方の信者たち)を成長させるため。

**一人が救われ、成長することが信仰者の益**



総督に訴えるパウロ



### Ⅲ. まとめと適用

成長するクリスチャンとして歩むために

## 【パウロが心砕いていたこと】

- 偶像に献げた肉を巡る議論で、常にパウロの頭にあったことは？  
→ユダヤ人信者(メシアニックジュー)と異邦人信者の共存と一致。
- 確認される、**エルサレム会議**(使15章)のユダヤ人への配慮事項。  
「ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。使15:19」
- **エルサレム会議**で、異邦人も福音を信じて救われることが確認。  
一方、律法に慣れ親しんだユダヤ人信者への配慮が求められた。

## 【なぜメシアニックジャーへの配慮が必要だったのか？】

- 当時、異邦人信者が存在感を増し、主流となった地域教会も出現。
  - ➔ その急先鋒がコリント教会
- ユダヤ人信者への配慮も薄まり、人目もはばからず、偶像礼拝の儀式的食事に堂々と加わる者すら、出てきてしまっていた。
- ユダヤ人信者と異邦人信者の間に亀裂が生じ、広がっていた。
  - ➔ 最大の懸念は、教会から**本来の文脈**が失われてしまうこと。
  - ➔ パウロは、あえて**イスラエルの歴史**の強調から議論を始めた。

## 【パウロが懸念していた、異邦人教会の行く末】

- 人の罪の重さと神の戒めを身をもって知らされて来たのがユダヤ人。  
→ だからこそ、信じると主イエスの贖いが魂の底にまで深く響く。
- しかし、律法の重みを知らない異邦人が福音を信じて救われると、キリスト者の自由ばかりを強調してしまう傾向がある。  
→ 救われたら何をしてもいいと、倫理的墮落に陥る者も出てきた。
- 異邦人中心となった教会の行く末を、パウロは案じていたのだろう。  
→ 「ユダヤ人は神に見捨てられた？」ローマ書を中心テーマ(11章)

## 【主イエスの警告と重なるパウロの懸念】

- イエスは、偽りの教えが入り込み、教会に蔓延すると警告した。
  - ➔ 成長するからし種、ふくらむパン種のたとえ(マタ13:31~33)
- ローマ公認、国教となり、ユダヤ人が周辺に追いやられた教会で、本来のヘブル的文脈は失われ、比喩的解釈が横行していった。
  - ➔ イスラエルを教会と読み替える「置換神学」が主流に。
    - 3世紀以降、現代にいたるまで、パン種は膨らみ続けてきた。
- 主イエスの警告、パウロの懸念が現れたのが、現在の教会の混乱。
  - ➔ 最大の文脈、イスラエルを失っては、聖書は理解できない。

## 【現在の教会に現れている、ヘブリス的文脈の喪失の結果】

■ 聖書全体を一つの文脈で捉えられない。

→ 終末論が分からない、信仰生活のゴールが分からない。

■ 福音を信じて救われておしまい。漫然と天国を待っているだけ。

→ その先の聖化、信仰の成長にいたらない。

幼子の信仰が後退すると救いの確信すら容易に失われる。

■ 初歩の教えもわきまえない幼子ばかりの教会の行く末は？

→ 内向き指向。支配的従属関係。伝道の停滞。教勢の低下…。

## 【ヘブル的文脈を回復し、私の信仰を回復、成長させていこう】

- ヘブル的視点で聖書を学ぶと、信仰生活のゴールが見えてくる。使徒たちの教える初歩の教え(救済論、終末論、イスラエル論)を身につけた上ではじめて、日々への適用力もついていく。
- 混沌を増す世界に、振り回されてはいないだろうか？  
本質とそうでないものを見極める力を着実に身につけていこう。  
福音を告げ、聖書を解き明かしていこう。  
世に揺るがされることなく、御言葉に立ち、主を証しして行こう。

**信仰の本質に立ち、喜びと平安をもって世に遣わされていこう**

- 「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
- ①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
  - ②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
  - ③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

イスラエルのメシア、主イエスは来られ、救いの御業(みわざ)を成し遂(と)げられました。主は栄光の姿で、再び戻って来られます。天に挙げられるその時まで、地上での使命に歩む者としてください。福音を告げる者として、喜びと平安の内に遣(つか)わして下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」